

自己表現力を育む自己PRの授業実践

ーモデルアカデミーでの談話分析をデータとしてー

渡慶次りさ（慶應義塾大学大学院生）

1. はじめに

本研究は、モデルアカデミーの生徒を対象に行う自己PRの授業実践を通して、評価基準・フィードバック方法を明らかにし、アサーティブな自己表現力を育む自己PRの授業を構成することを目的とする。

自己PRとは、「自分の特徴を相手にアピールする」行為である。一般的に自己PRは、就職活動をしている学生が面接の際に面接官から問われる質問の一つでもあるが、芸能活動をしているモデルやタレントにとっても、オーディションの際に聞かれるものである。自己PRに関して森本・高橋(2014:920)は、「我が国では自己PRなど自らの長所をアピールすることに対する強い抵抗感や苦手意識が指摘されており、リクレーターにとっても特に負担が大きい部分であると考えられる」と述べている。自己PRは面接において重要とされながらも、自分の良い部分を自ら伝えるという恥ずかしさが苦手意識を高める。また面接時にのみ必要な行為であり、自己PR自体に価値がないのが現状である。

しかし自己PRは、本人にしか作ることのできない文章であり、その点に価値があると筆者は考える。本研究ではその点に注目し、自己PRの授業を実施した(図1)。そして本授業が生徒にとって、自分を言葉で表現する意義と方法を学び、相手を理解し自分の言葉へ反映することを意識するきっかけとなることを目指す。



図1 授業の様子

2. 先行研究

堀之内他(2016:312)は自己表現力を、「一人一人のものの見方、考え方、感じ方を大切に、相手の気持ちを考えながら、自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝える力」と捉えている。本研究では自己表現力を、「相手の気持ちを理解し、自分の思いを伝える力」と定義する。伊藤(2016)は、古本(2013)が談話分析により明らかにした自己PR文の「型」に則った文章を作成し、実験参加者に評価させる実験を行った。その結果、書き手は、読み手が望んでいる以上に自身の経験したことを出来事の連鎖として表現する傾向にあることが伺えた。しかし読み手は、その経験の目的やその経験から得たことの意義を重点的に記述し、説明することを求めている。以上のように、自己PR文において書き手と読み手が重要視する事柄には違いがあることが明らかになった。聞き手の気持ちを考えながら自己PRをつくる過程のなかで、相手の気持ちを理解し自分を伝える力である自己表現力を育むことができると筆者は考える。

なお自己表現力の育成は、国語や英語、体育、算数、音楽、美術等、様々な分野において既に行われている。本研究により、自己PRが自己表現力を育む一つの新しい分野となるだろう。また自己表現といっても様々な種類がある。堀之内他(2016:312)は、アサーションを「自分と相手の相互を尊重しようとする態度で行うコミュニケーション」と定義し、アサーション・トレーニングを取り入れたアサーティブな自己表現スキルを育む授業実践を行った。本研究ではアサーティブな自己表現力を育むことを目指し、研究の目的を「アサーティブな自己表現力を育む自己PRの授業を構成する」と設定する。その「育む」とは、相手の気持ちの理解と自分の思いを伝えることの両者を両立させることとする。

3. 調査対象

モデルアカデミー、「Kansai Collection ENTERTAINMENT 東京校(KCE モデルアカデミー、以下 KCE)」で、筆者が

講師を務めるレッスン「言葉のデザイン(プレゼンテーション)」を2017年10月に開講した。授業はチャイルドコース(未就学児・小学生)と一般コース(10~20代)のモデル志望者およびモデルの生徒を対象に、渋谷のスタジオで行った。なおKCE東京校は2018年9月末に閉校した。本研究では、90分間の一般コースの授業を取り上げ、観察、分析を行う。記録は、ボイスレコーダーとビデオカメラを使用して録音・録画した。

授業を3回実施した後、本授業では相手の気持ちを知り自分の言葉に反映する、評価・フィードバックが特に重要だと考え、初歩的な自己表現活動としてShow and Tellを大学の授業に導入した田邊(2006)の評価方法を参考に、授業を再構成した。自己評価と相互評価を行う10項目30点満点の評価シート(図2)を筆者が作成して配布し、生徒は発表時に記入した。さらにフィードバック時には話し合いの時間を設け

た。発表者が一番言いたかったことと聞き手に伝わったことについて話し合い、答え合わせをしていく。その声から生徒は相手の気持ちと自分の伝えたいことを整理し、自己PR文を再構成する。そして90分間の授業における生徒の自己PRの変化を、筆者が談話分析とジャンル分析の方法で分析する。その結果をアサーティブな自己表現力を育む自己PRの授業に活用する。なお田邊(2006)は授業開きの際、学生に学習経験調査を行っている。本授業に参加する生徒は毎回異なるため、筆者も授業前に自己PRの学習経験や自信、年齢等を生徒に記入してもらい、個人差を考慮して指導した。

以上のことから研究課題を、「アサーティブな自己表現力を育む自己PRの授業を構成するには、どのような評価・フィードバックが適しているのだろうか」と設定し解決を目指す。先行研究には、既に完成している自己PR文を談話分析しているものはあるが、自己PRの構成段階から完成に至るまでを談話分析している研究は管見の限り見当たらない。構成段階から分析することで、そこで見られる生徒の変化から、自己表現力を育む要素を見つけた上で授業を作ることができる。

4. 調査結果

本章では、筆者が実施した授業(2017年10月11月12月、2018年3月4月6月9月に実施)の中から、2018年6月の授業に出席した20代女性、荒川華さん(仮名)の自己PRを取り上げる。授業前に行った学習経験調査では、荒川さんは自己PRの授業を受けた経験はなく、自己PRに対する自信は5点満点中3点だった。この回の授業には10代男性1名も出席していた。最初に自己PRを考えて発表し(図3)評価シートを記入した。なお個人的な部分は伏せている。

A 内容(耳に届いたもの)
具体的: 具体的で分かりやすかった
簡潔: 話がまとまっていた
人となり: どのような人なのか分かった
B 姿勢(目に届いたもの)
姿勢: 立っている時の姿勢が良かった
表情: 話している時の表情が良かった
話し方: 聞きやすい話し方だった
C 印象(心に届いたもの)
印象: 個人的で印象に残った
熱意: やる気や熱意を感じた
将来性: その人の将来が想像できた
魅力: また会いたいと思った

図2 評価シートの一部

- 1 荒川華 2X歳, モデル業を 1X の頃から始めました.
- 2 それで、まあ競争率とかライバルがいるなか、やっぱり挫折する友だちもいっぱい見てきましたし、未だにモデル業をやってる私は、なんかめっちゃ長いみたいで、でも周りが母親とかになって、でもやっぱり、周りの人たちに言われるのは、華はやりたいことをやり続けててすごいキラキラしているから羨ましいとみんなから言われます。
- 3 その分私も、辛いことも未だにたくさんありますし、頑張らなきゃ生きていけない世界なので、なんか楽しいことだけでは無いですけど、でもここまで頑張ってきたからこそ、今私はXが大好きなんですけど、XXXXX モデルというお仕事をいただいたり、あのそっちのモデル業として今がんばっております。
- 4 なのでまああきらめが悪いのは、ある意味自分の好きなところなので、そこを自信を持って、これからも頑張りたいと思います。

図3 荒川さん1回目の発表(否定的な意味を含む文章_____, 肯定的な意味を含む文章_____)

1回目の自己PRは否定的な印象となる文章が多く、一文が長い。後半では、肯定的な文章の割合が多くなっているが、一文の中に否定と肯定的な意味を含む文章が混在しているため、結果的に否定的な印象が残ってしまう。この時の自己評価総合点は30点満点中19点。「具体的」、「簡潔」に対する点数は、それぞれ3点満点中1点で評価が低かつ

た。感想にも、「もっとまとめるコトができたはず」と書いている。その後、生徒の自己 PR の講評を行い、自己 PR 構成のポイント(過去・現在・未来における自分について考える、理想像や具体例を語る、周りの声を取り入れる等)の指導を行い、マインド・マップを使用しそれぞれ自分について振り返った。その中で講師は荒川さんの個性に注目し、以下の発問をした。

講師 : すごいカッコさがみえたと思うんですけど、自分の中でこういう風になりたいとかありますか。

荒川さん : カッコいい理想像は昔から持っていたので。そうですね、あとなんかこう自分の話をするのは昔から好きだから、全然、緊張とかそういうのはないです。

と答えた。その後、生徒の個性を取り上げ深めていった。また、生徒の言いたいことをまとめるため、以下の発問をした。

講師 : 自分が一番言いたかったことって何でしたか。

荒川さん : 自分のやりたいことを、なんか真っ直ぐ突き進む、自分がまあ好きっていうのもあるし、諦めなければとにかく良いことがあるっていうし、ってことなのかな。ちょっと分かんなくなっちゃった。

と答えた。続いてマインド・マップを生徒同士で見せ合い、目標の人物を考え相互評価を確認した上で再度発表した。2 回目の自己 PR は割愛するが、荒川さんは最初に見出しとなる文を述べて印象付けた。また一文を短くまとめ、文中の迷いが少なくなったものの、自分の思いを振り返る経験談が具体的ではなく、一番言いたいことが決まっていなかったことから、冒頭と最後の文の統一性がなくなっていた。そして講師が講評、指導をして生徒は再構成し、3 回目の発表を行った(図 4)。

- 1 私は自分を好きでいられる人生にしていこうと、小さい頃から思い、自分のなりたい女性像を描いてきました。
- 2 それで、わかりやすく言うと、私はカッコ良い女性がすごい好きなので日本人で言うと夏木マリさんみたいな、なんか自分を堂々と持っていて、自信ある、で自分の発言を恐れない考えとかも信じていて、やっぱカッコいいなって思って、そーゆー女性に近づきたく、色々努力してきました。
- 3 努力の仕方は、色々あるんですけど、結構私人に言えなかったことを言いたいけど言えない自信がないとき、自分の中で3カウントします。
- 4 それで、3, 2, 1 行け、って自分の背中を押して、これ違うんじゃないとか私はこうやりたいですとか言うように練習してたら、いつの間にか言いたいことが簡単に言えるようになって、自分にも自信がつき、そのモデル業も自分に自信がないと難しい職業なので、だんだんと友だちからも自分に自信ができてきてるねキラキラしてる、楽しそうと言われるようになってきました。
- 5 なので今の自分のことが大好きです。
- 6 これからもがんばります。

図 4 荒川さん 3 回目の発表 (ポイントとなる部分に下線を引いている)

話し合いの際に話題になった点を整理し、3 回目で荒川さんは、最初に自分の大切にしている思いを提示し、理想の女性像である女優の名前を挙げた。続いて努力の方法を具体的に話した。否定的な印象の言葉は少なくなり、努力の結果を周りの声とともに述べてまとめている。一文が長く将来に関する話は少ないが、文の接続および展開が分かりやすくなった。自己評価の総合点は 27 点。1 回目の評価に比べ、7 項目の点数が上がった。相互評価は、満点の 30 点になった。

古本(2013:80)は、就職活動の際に提出するエントリーシートに書かれた自己 PR 文を、Swales(1990)のジャンル分析と大島(2009)の手法を参考にして分析し、特徴を明らかにしている。抽出した文章を、文を単位として区切り、談話の大きいまとまりのムーブと、その下位分類のステップを抽出している。本研究においても、自己 PR 文を分析してその変化を比較し、それらの特徴を解明していく。次頁の表 1 が、荒川さんの 3 回の自己 PR 文を分析し、表にしたものである。自己 PR の授業では、2 回目の発表時に混乱する生徒が多い。なぜなら講師が述べた技術を取り入れようとするからだ。しかし 3 回目の発表では、1 回目の思いと 2 回目の技術を取り入れまとめることができ、その良い部分を組み合わせた結果となった。

表 1 荒川さんの自己 PR の展開, 評価結果

	1 回目	2 回目	3 回目
構成	1 プロフィール 2 周囲の現状, 周囲の声 3 困難, 仕事の現状 4 自分の強み, 目標	1 見出し 2 理由 3 4 5 過去の自分 6 変化の契機 7 仕事の経験, 行動	1 見出し 2 理想像 3 努力の方法 4 行動, 結果, 周囲の声 5 6 まとめ
	自己評価:19 点 相互評価:20 点	8 経験意義 9 10 目標	自己評価:27 点 相互評価:30 点

その他の生徒も含め, 一般コース全 7 回の授業における, 授業開始後と授業最後に生徒が発表した自己 PR を比較した。その結果, 授業前後で複数の変化(取り上げるテーマ, 印象に残る言葉の使用, プロフィールの羅列, 趣味と目標の関係性, 過去・現在・未来の割合, 経験談の具体度, 否定的な要素の割合, 文章の前後関係, 一貫性, 一文の長さ, 文中の迷い等)があり, そこに差が生じることが分かった。特に生徒は自己 PR の発表を重ねることで, 自分を表し印象に残る言葉を生み出して, そのキーワードとなる言葉を取り入れるタイミングを考え自己 PR を再構成した。そして展開する理由を整理して具体的に表現することができるようになった。また評価シートを見ると他者による評価に比べ自分を低く評価している生徒が多く, 特に「簡潔」, 「魅力」に対する評価が低かったが, 授業後にはその点数が他の項目以上に上がった。

5. まとめ

本研究のゴールは, 自己 PR の授業ための評価基準・フィードバック方法を確立し, アサーティブな自己表現力を育成する自己 PR の授業をつくることである。自己 PR に関する書籍や授業は既にあるが, 本研究では自己 PR 自体に価値を与える。そして自己表現力を育成する分野の一つとして, 自己 PR を提示する。これまでの研究で, 自己評価と相互評価を行うことで, 生徒は新たな角度から自分を振り返ることができた。また他者に教えてもらい知った個性を, 自身で深め言語化することで, 自分だけの新たな言葉が生まれた。今後は, 本研究で見られた授業前後の変化の要因を, 談話分析とジャンル分析をより詳細に行うことで明らかにする。そしてそれらを評価に取り入れ, フィードバックする授業を構成する。

生徒にとって, 自己 PR の聞き手は毎回異なる可能性が高い。しかし自分自身とはずっと付き合っていくことになる。変化する自分と向き合い, 自己 PR による自己表現を学び, 自らを表現する言葉をデザインすることは, 生涯の学びとなる。90 分という短い時間ではあるが, 本授業が, 以前とは異なる視点から自分を表現する新しい目を持つきっかけとなる。

参考文献

- 安達元一・藤本貴之監修 (2013). アイデアを脳に思いつかせる技術 講談社
- 古本裕子 (2013). 就職活動における自己 PR 文の談話分析 日本語教育方法研究会誌, 20(1), 80-81.
- 堀之内利成・立岡昌文・呉屋博 (2016). 児童の自己表現力を育む授業づくりに関する実践研究—自他尊重の態度を大切にしたい伝え合い活動に焦点を当てて— 教育実践総合センター紀要, (15), 311-320.
- 伊藤俊一 (2016). 自己 PR 文の各構成要素の重要性について 愛知教育大学研究報告.人文・社会科学編, 65, 159-163.
- 森本哲介・高橋誠 (2014). 職業訓練校における自己 PR 支援プログラムの効果(臨床,ポスター発表 H) 日本教育心理学会総会発表論文集, 56, 920.
- 大島弥生 (2009). 社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析 専門日本語教育研究, (11), 15-22.
- Swales, J. M., (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge University Press.
- 田邊義隆 (2006). 大学英語教育における Show and Tell を用いたスピーチ指導の試み—自己表現力の育成と学びの共有を求めて— 語学教育部ジャーナル, (2), 1-21.